

研究課題 (テーマ)	富山県の介護予防・健康増進活動へ参加する 高齢者のヘルスリテラシーの実態		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部	助教	稲村 尚子
	看護学部	教授	張 平平
研究結果の概要			
<p>我が国の高齢化に伴い、高齢者の介護予防及び健康寿命延伸は地域医療における重要課題である。ヘルスリテラシー (HL) は健康寿命の延伸のために必要不可欠な能力であるが、高齢者の HL を高めるためには、居住する地域の特性を踏まえた高齢者の HL の把握が必要である。しかし、これまで富山県全域を対象とした高齢者の HL の調査はされていない。これらの背景から本研究は富山県の地域性を加味した健康寿命延伸への政策や事業、教育、看護支援活動の活用につながる基礎資料を得ることを目的に富山県の高齢者の HL について調査を行った。その成果を第 44 回日本看護科学学会学術集会 (2024 年 12 月 7 日～12 月 8 日熊本にて開催) で以下内容の発表を行った。</p> <p>【結果】調査票は 591 部配布し、365 名より回収 (回収率 61.8%)、回答不備を除く 334 名を分析対象とした (有効回答率 91.5%)。平均年齢は 76.9 歳±6.5、健康への関心は「ある・まあある」と回答した者は 327 名 (98.0%)、健康情報の入手にインターネットを利用していない者は 188 名 (56.3%) であり、HLS-EU-Q47 で「困難」の者の割合が最も多かったのは、「12.メディア (テレビ、インターネット、その他のメディア) から得た病気に関する情報が信頼できるかどうかを判断するのは (69.2%)」の項目であった。HLS-EU-Q47 の標準化指数の平均 (SD) は[総合 HL]28.8 (8.7)、HL3 領域・4 能力の全てで判定基準「やや不十分」に該当した。</p> <p>【考察】対象者は健康へ高い関心を持っていると言えるが、HL の標準化指数の平均は総合・3 領域・4 能力の全てで「やや不十分」と判定され、HL 向上への介入の必要性が示された。特に健康情報入手への利用率が低かったインターネットの普及や、「困難」の割合が最も多かったメディアの操作、そこから得た情報の信憑性の判断についての研修会や勉強会の開催、膨大な情報を正しく理解・評価・活用できるよう支援やサポート体制の充実化が求められる。</p>			
今後の展開			
<p>今回の発表会場で得られた助言や知見を基に本研究課題の考察をより深め、論文執筆を進める。国民の健康寿命の延伸は、日本の社会経済にとって重要な意味を持ち、健康寿命の延伸に繋がる HL の向上は我が国で早急の課題と言える。高齢者の HL はその生活環境や人生背景などによって様々な影響を受けると予測されるが、我が国では高齢者を対象とした HL の研究は数が少なく、エビデンスの構築のためデータを蓄積していく必要がある。今後は健康増進活動へ参加していない、在宅で介護を担っているなど、状況の異なった高齢者を対象に HL の実態の調査を行うことや、高齢者が入手した健康情報をどのように理解・評価・活用につなげているのか、そのプロセスや様々な関連要因についての検討を行う。また、高齢者の HL 向上を目指した訪問看護での支援内容なども検討していく。</p>			